

大高字子葉、此士赤穂臣、豪爽慕蘭氏、英雄亦絶倫、烈々義方士、寧敢知苦辛、豫讓感國士、張良推強秦、忽怒毛髮動、擊劔天地震、意氣何以壯、忠死如塵芥、昔聞勇士扛鼎饗主賓、今日吾人會異器、傳此身、此身無長物、珍重口千鈞、伏櫪燕市駿、壯心磨不磷、富貴如浮雲、爵祿寧敢陳、尊中酒數斗、沈醉更幾春、

〔鶉衣前篇上〕鍋蓋額賛

むさしにかりに旅居せし比、あやしの店に求め出せるものあり、さるは鶯やほしがらむ小鍋の蓋なりけり、さんは落て釘の跡のこり、月もるばかりの節穴ありて、いと古うす、けたる色の、わざとならず、そのわびしさのほどを思ふに、獨坊主の佛供をや調じけむ、借屋の婆の娘をやふすべけむ、是をたづきとまろなしける哀は、あみごこ賣る人にもまさりて思はる、に、今はたこれを買取し我を、あるじのいかに見なしぬらむ、世に摺鉢に蓋なきと諷はる、を、かれは蓋のみありて、みはいづこにか引わかれし、いまさらに異鍋にうちきせたらむは、小夜衣の名に立もうしと、あはれに見しまゝに、物よくかく人かたらひて、これを閑居の額となしぬ、

たれ雑炊に落葉たきぬるす、けし昔とへどこたへす われわれ鍋の世をのがれなば よし綴蓋の汝とあそばむ

鍋取

〔用捨箱上〕鍋取

鍋取公家といふは、いやしめていふにはあらず、老懸おいかげをかけたるをいへるなり、老懸を俗に鍋取なべとり又釜取かまとりともいふ、さて今厨にて鍋取をもちふる家、たま〜はあれども、草鞋わらじ足半あしなまの形に作れり、古製は玄からず、ちいさき扇の形したるが、彼老懸に似る故に、玄かいひしなり、略中太平記抄長慶十五、著二十四卷、卷纒の老懸の注に、老懸とは下々の者の鍋取といふやうな者ぞと見え、略中今は老懸を知らざる者なく、厨の鍋取は見ざる人おほかるべし、

〔續日本紀一文〕四年三月己未、道照和尚物化、略中初孝徳天皇白雉四年、隨使入唐、適遇玄奘三藏、師